

---

# 主人公は苦勞人

マサキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

主人公は苦労人

### 【Nコード】

N6360A

### 【作者名】

マサキ

### 【あらすじ】

不思議な力を持つ人達に囲まれて一人苦労している少年の話し。笑い？ありラブ？ありシリアス？ありのどたばた現代ファンタジーです。

## プロローグ（前書き）

ども、初めて書かせていただきます。素人なのでいろいろ間違っていると思いますが、どうか勘弁してやって下さい。

## プロローグ

この世界には『力』を持つ人々がいる。

彼らはこの世界に同じように存在する魔の物を倒す為にその『力』を使っていた。

しかし、『力』を持つ人々は、時がたつにつれ段々その数が減っていった。

そして、時は現代。人々は平和な日々を暮らしていた。

しかし、その影には、『能力者』と呼ばれる人々がいた。

これは、そんな人達に巻き込まれてしまった少年の物語。

## 第一話新しい街で

ここは、とある街の駅前。そこに、二人の少年少女がいた。

「へー、けっこう都会なんだ」

少年はそう言つて辺りを見渡した。少年の名前は『神崎 真哉』（かんざき まさや）彼は今日この街に引越してきたばかりだった。『それはしかたないよ、私達が居た所が田舎すぎたんだよ』  
そう言っているのもう一人の少女

「神崎 光」

（かんざき ひかり）だった、彼らは一応兄妹だった、一応と言うのは彼らが血の繋がらない義の兄妹だからである。

「まあ、たしかに田舎だったな、あそこは」

彼らが前に住んでいた所は、ほとんど村と言つてもいいくらい人口が少なかった。

「けど、あそこも良いところだったよね」

と、周りを珍しそうに見渡しながら光が言う。

「ほら、そろそろ行くよ」

「あつ、待つてよ」

そう言いながら、二人は歩きだした。

僕達が向かったのは、これから住む予定のアパートだった。駅の近くにあつて、学校にも徒歩で通える距離にある、なかなか好条件のアパートだった。まあ、その分少し古い建物だと言うことは気にしないでおこう。

「あつ、あれじゃないかな？」

そう言つて指をさす光の視線の先を見ると、木造のアパートが見えた。

「うん、多分あれだね」

「じゃあ、あそこまで競争」

「えっ、ちょ、ちよっと待つてよ」

僕はいきなり走りだした光を慌てておいかけた。

「ハア、ハア、に、兄さん、早いよ」

息をきらしながら、上目使いに僕を見上げる光。くう、か、可愛いっ、少し長めの髪に整った顔、美人とゆうより美少女な感じだ、それもかなりのの。

「光が遅いのが悪いんだよ」

なんとか平常心をたもってそう言い切った僕は、慌てて階段をのぼり、僕達の部屋である203号室に急いだ。

「あつ、兄さん待つてよ」

光も僕の後をおいかけてくる。

これからの生活僕はどうなることやら。

## 第二話いつもの日常（前書き）

びっくりしました。こんなもんでも見てくれる人がいるなんて。多分更新遅れると思うけど、これからがんばりたいです。

## 第二話いつもの日常

まだ夏と言うには早いこの時期の朝は、まだ少し肌寒い、だが昼ごろになると、うってかわってかなり暑い、温暖化とは怖いものだ。

現在僕は、布団の中で夢の中だ。朝に弱い僕が自力で起きることはほとんど不可能で、誰かさんが起こしにくるまで、いつまでも寝てしまう。そして、間抜けな顔で寝ている僕は、その誰かさんが自分の部屋に入って来ても、まったく気付かない。

「兄さん、朝ですよ」

その侵入者、光が僕を揺すりながら呼びかける。だがその程度で起きる僕ではない、そのことは相手も承知済みなので

「もうっ、しょうがないな」

とか言いながら数歩後ろに下がり

「兄さん、起きろー！」

そう言っておもいきり僕の上にダイブ！

「ぐうえっ」

と間抜けな声を出しながら、僕はいきなり襲った激痛で目を覚ます。

「ま、また、いきなりなにすんだっ」

僕は苦しみながら、上に乗ってる光に言う

「だって、いつも兄さん起きないから」

「だからって、いきなり飛び乗るなよ」

少しはこっちの身にもなってほしい。

「ハア、もういいよ、とりあえず降りて」

と光に言う、いつも思うがこの体制は非常によくない

「あ…ご、ごめんっ」

と、光はいつもどおり顔を赤くして飛び退く。僕は少し意地悪してやりたくなって

「顔赤くするくらいなら、しなきゃいいのに」  
と言ってみる。



「う、うるさいなっ、早く朝食作ってよねっ」

光は少し焦ったようにそういいながら部屋を出ていった。

学生服に着替えた僕は、顔を洗って、簡単に朝食を作った。

僕達の朝は少し変わっていて、朝に弱い僕が光に起こしてもらって、料理のできない光に変わって僕が料理をするという感じた。これで、光が料理上手なら完璧なのだが、試しに作らしてみたが、見た目はかなり美味しそうだが、一口食べて僕は強制昇天しかけた。そういうこともあって今では、光が朝起こす係、僕が料理する係に自然になっってしまった。

そんなことを思い出していると

「ご馳走さま」

と光が言っ自分の食器を片付け始めた。まったく自分の朝食に手をつけていなかった僕は、急いで食べ始めた。朝食を食べ終わって片付けをしていると。

「今日から新しい学校に行くのかあ」

と光が言う。

「そうだね」

と相槌をうつ

「緊張してる？」

そう聞かれて改めて考えてみる。

「うん、かなり」

と答える。

「ふふふ、大丈夫だっ」

と光は笑いながら言うが、今になって緊張してきた。

「よし、じゃあ行こう」

と片付けが終わった僕はそう言った。

「うん、早く行かないと遅刻しちゃうよ」

そう言いながら光は時計を見る。【AM8:00】そろそろ出発しなければ遅刻してしまう。

「じゃあ、行ってきます」

「行つてきまゝす」

そう言つて僕達はアパートを出た。

今日から新しい学校生活が始まる。

### 第三話偶然の出会い（前書き）

新キャラ登場です。けどまだ名前が出てない…

### 第三話偶然の出会い

学校へは、僕達の住んでるアパートから徒歩15分くらいの距離で、結構近い所にある。本当は寮もあるけど、光の母（一応僕の母でもあるのだが、僕はあの人を母とは思いたくない）が、

「光は人の多いところ苦手だから、アパートでも借りなさい」

と、言っていた。光はそれで納得していたけど、僕は納得しなかった。だってそんなことを言ったら、寮なんかより人の多い学校はどうなんだ、と思うのが普通である。しかしあの方はそんな僕の考えを、僕にだけ聞こえるくらいの声で言った一言で簡単に打ち砕いた。「だってそのほうが、あんた困るじゃない」

これを聞いた時、ああ、やっぱりこの人はなんて人だろうと思った。たしかに僕はかなり困る。だって光は家事がほとんどできないから、ほとんど僕がしなければならいし、何より、若い男女が二人つきりと言うことが僕を悩ませる。ああ、義理とはいえ妹相手に少しでもこんなこと考える僕は最低だろうか？

そんなことを一人考えながら歩いていると光が急に立ち止まった。

「あれ、どうかした？」

「兄さんあれ……」

と言いながら指をさす先をみれば、狭くて薄暗い路地、まあ属に言う裏路地みたいな感じのところに、女の方が一人と男が二人いた。これは明らかにナンパってやつだな、しかもたちのわるい。

「ねえ、助けなくていいの？」

と聞かれて僕はうーんと唸りながら、まず男達の方を見る。

少し高めの身長にチャラチャラした格好は、どこにでもいそうなチンピラって感じだ。

次に女の方を見る、かなりの美人だ、顔は目が少しつり目がちだけど、すごく整っていて美しい黒髪は腰あたりまである。光が美

少女なら彼女は美女って感じた。その美女は無表情で相手を見ている。そこからは、普通なら感じさせるはずの脅えとか恐怖がまったく感じられなかった。そんなことを考えていると、いきなり美女が動いて、

「あっ……」

と、僕が言った頃には男二人が地にひれ伏していた。

「なんか、助けとか必要なかったみたいだね」

「う、うん、そうだね……」

ザコ二人を片付けた美女は、だんだんこちらに向かって歩き出していた。そんな急なことに僕達があたふたしている間に、美女は僕達の前に立っていた。

「おい。」

「は、はいっ!？」

その美女の凛とした声に呼ばれて、僕は思わず返事をしていた。

「今の、見たのか?」

「えっ!？あ、はい」

「そうか……」

そう言っただけで美女は少しの間黙ってしまった。そして急に口を開いて、「お前達見ない顔だが、その制服を着ていると言っことは、転校生か?」

と聞かれて、どうしてそれだけで転校生とわかったのかはわからないけど、とりあえず

「あ、はい、そうです」

と答えておくことにした。

「そうか……」

と言っただけでまた黙ってしまった美女はまた急に口を開けて

「なら、一緒に行つてやろう」

と言った。なんで今あつたばかりの僕達にそんなことを言うのか、と僕が思っていると

「あの学校は無駄に広いからな、初めて入るやつのがほとんどが迷っ

てしまうんだ」

と、言ってきた。へえ、そなんだ。え、あれ？

「なんで、僕の考えてることがわかったんですか？」

僕は一言もしゃべってないと思っただけだ…。

「ふふ、それはお前が分かりやすいだけさ」

と言っただけ。美女は微笑んだ。その笑みで僕は思わずドキッとしてしまった。

「よ、よかったね光この人が案内してくれるって」

と今まで黙っていた光に言う。すると光は冷めた目で僕を見ながら

「ふーん、よかったね、兄さん」

と少し怒ったように言ってくる。

「あれ、どうかした？」

「別にっ、どうもしてないもんっ！」

とこんどはすねたように言いながら一人歩き出した。僕と美女は顔を見合わせて慌ててその後を追った。

#### 第四話初登校（前書き）

やっぱり更新遅れ気味です。

## 第四話初登校

僕達二人は、その美女こと竜崎 零さんと一緒に学校の校門の前にいる。（名前は来る途中に教えあった）

「おつきいね」

光のその言葉に、僕は改めて学校全体を見る。

校門はいたって普通だが、校庭がかなり広い。

零さん（なぜか名前で呼べと言われた）の話では、この校庭は緑も豊かで、噴水やベンチなどもあって生徒にも人気だそうだ。そして校舎は、一目見ると、まるで砦のような形をしていて、生徒達が普段生活している校舎が四角形のようにあって、その真ん中に部室棟と一部の生徒が暮らす寮があるらしい。どうしてこの様な配置になっているのか零さんに聞いてみたが、含みのある笑みを浮かべるだけで、結局答えてくれなかった。

「ほら、行くぞ」

そう零さんに促されて僕達は校舎の方に歩いて行った。

校舎の中はとても綺麗で、本当に100年以上の歴史がある（パンフレットに書いてあった）のかと疑問に思ったが今は気にせず零さんの後に付いて行った。

「ほら、ここが職員室だ」

零さんが言うようにスライド式のドアの上には、【職員室】と書かれたプレートがあった。職員室があった場所は、南棟と呼ばれる場所（南にあるからそう呼ばれてる）の一階にあった。

「じゃあ、私は教室に行くからな」

「あ、はい、ありがとうございました」

零さんはわずかに微笑んで、自分の教室に向かって行った。

「それにしても、零さんって親切な人だったね」

「うん、そうだね。それに綺麗だったし」



光の言葉に僕は思わずそう言っていた。すると、機嫌が良くなっていた光はすねたように頬を膨らませて

「どーせ私は、零さんみたいに美人じゃないですよっ」

と、言つて一人職員室に入つて行つた。何を怒っているのだろうと不思議に思いながら、後を追つて職員室に入つた。

失礼します、と言つて職員室に入ると、一人の教師がこちらに氣付いて

「おーい、こっちだ」

と、言いながら手招きしている。僕達はその先生の前に行つた。

「転校してきた神崎です」

「おう、話は聞いてるぞ。俺がお前らの担任の熊谷だ、よろしくな！」

熊谷先生はガハハと豪快に笑いながら、僕の背中を叩いてきた。ちなみに光と僕の歳は同じだ。僕の方が誕生日が早いから光が勝手に兄さんと呼んでるだけで、変な趣味があるわけでもない。

「よ、よろしくお願いします」

熊谷先生に叩かれた背中をさすりながら挨拶をした。

「さてと、これから教室に行くわけだが…わかつてるな？」

さつきまで笑っていた先生は急に真面目な顔になる。まあ、言いたい事は分かるけど。

ここ【私立月光学園】には表と裏の顔がある。表は他の学校よりレベルが高いが、どこにでもありそうな普通の学校と言う顔。そして、裏の顔。それはこの学校が、能力者の学校であると言う事。能力者とは、簡単に言うと思議な【力】が使える人間の事だ。今の時代でも、数は減つたけどそう言う学校は全世界にあるらしい。

先に言つておくけど、僕は能力者ではない。光が能力者なのだ。まあ、光がどうやって能力者になったかは、今は思い出さないでおこう。そう言うことから、僕はこの学校唯一の普通の人間だと言うことになる。そうなると一人になつてしまわないかと言う事を先生は

心配しているのだろう。そう言うのは結構なれてるけど。

「はい、大丈夫です」

「そうか。まあ、あいつらなら大丈夫だろうから、安心しな。」  
そう言っつて先生はまた笑った。

「よし。それじゃ行くぞ」

先生はそう言っつて、教室に向かった。その後を追いついてみると、  
光が

「ねえ、本当に大丈夫？ やっぱり私だけの方がいいんじゃない？」  
と言っつてきた。そんな事言っつて、本当は自分が一番一人になりたくないくせに。

「大丈夫だつて。それより光こそ大丈夫か？」

とりあえず僕は違つ話題を振る。

「へっ、どーして？」

「いや、仮にも私立なんだから、それなりに人もいるんじゃないかな  
なて思っつて。」

「あ………ど、どどうしよう、緊張してきちゃったよう」

今頃になつてそんな事を言う光に苦笑しながら、がんばれと言っつて  
やる事しかできなかった。

## 第五話偶然の再会！？

僕達は、これから僕達の教室になる2年2組の前にいる。2年生は全部で5クラスあって、生徒の【力】の強さで配属されるクラス決まるそうだ。光の【力】の強さは、結構高い方なので2組、別名Aクラスに入ることになった。ちなみに1組がSクラスで、3組がBクラス、4組がCで5組がDクラスだそうだ。

「それじゃあ、呼んだら入って来いよ」

そう言って先生は教室に入って行った。

「よし、お前らよく聞け。今日からウチの生徒になる奴らを紹介する」

その声の後に、教室が騒がしくなる。

「おら、静かにしやがれ。それじゃあ入って来い」

先生に呼ばれて、僕は教室に入った。

教室に入った僕は先生の隣に並んで

「転校してきた神崎真哉です。よろしくお願いします」と普通の挨拶をする。

光程ではないけど、僕も人前で話すのは得意じゃないからそんな普通の挨拶しかできなかった。それでもみんなは、よろしくーとか言いながら拍手をしてくれた。まあ、外見が良いわけではないから、これくらいの反応が普通だろう。さて、次は光の番だ。と思っ隣を見ると光の姿がなかった。ドアの方を見ると、固まってしまっている光がいた。僕は溜め息をついて光の方に歩いて行く。

「ほら、早くしないと。」

「だって、まだ緊張してて…」

まだそんな事を言っている光の背中を無理矢理押して、教室に入っていく。

「ちょよ、ちょっと兄さんっ、まだ心の準備が……」

出来てない。と言い切る前に光をみんなの前に立たせる。

「あつ、えと、か、神崎光ですつ、よ、よろしくお願いしますつ」  
少しうつ向いて、上目使いにみんなを見る光。その可愛らしさに男どもが、スゲーー！とか、可愛い過ぎ！とか、萌え〜とか言ってた、最後の方は僕には理解デキナカタヨ？女子はと言うと、可愛い！と言う人もいれば、ふ〜ん。ま、本性はどうだか知らないけどね。とか言ってる人もいた。まあ光はこれが素なんだけどね。

「おら、静かにしろ。今日の一時間目は転校生への質問タイムだ。まあうるさくない程度にしとけよ。」

「はい」

そう言って先生は出て行った。

そしてさつそく質問タイムスタート。その標的はもちろん僕ではなく光で、光の席には人だかりができていた。その隣に座る僕もたまに質問されるが、ほとんど光の事についてだった。

いまだに質問去れ続けている光を見て、思わず溜め息がでた。

「大変そうだな、妹は」

「そうだね…」

聞き覚えのある声に自然と返事を返した。あれっ？この声は……あつ！僕はそれが誰だかわかって急いで振り向いた。

「零さん！？」

「また会ったな真哉」

そこには今朝出会った零さんがいた。

「零さん2年生だったんですか」

「ああ、以外だったか？」

「ええ、3年生だと思ってました」

実際零さんの外見はかなり大人びて見える。

「よく言われるよ」

そう笑いながら返してきた零さんに、僕も笑い返す。そこで僕は背

後から視線を感じて振り向いた。

そこには黒いオーラを放つ男どもと＋ がいた。その＋ とは光の事だ。男達はその嫉妬やら殺気やらがまざったオーラを放ちながらどーして転校生が竜崎さんとあんなになかがよさそうなんだっ！？竜崎さんがあんな楽しそうにっ！？とか言っている。まあ零さん美人だから人気があるんだろうなとか呑気に思っていると、

「兄さん…… 楽しそうですね」

その光の声はとて不機嫌そうだった。

「あのー、光さん？どーしてそんなに機嫌が悪いのですか？」

「…… もう知らないっ！」

そのままは光は黙ってしまった。

他の生徒が溜め息をつく中、僕と零さんにはどーして光が怒ってるのか本気でわかってなかった。

## 第五話偶然の再会！？（後書き）

テストが近いからしばらく更新できなさそうです

## 第六話 KDC襲来！？

いきなりですが現在僕は追われています。どーしてこんなことになったのか…、とりあえず僕は、今日起こった出来事を思い返す。

一時間目には色々あったけど、その後の授業は特に何事もなかった。

クラスのみんなに僕は普通の人間だと言った時は、最初はみんな戸惑っていたけど、そんな事関係無いと言われた時は、結構感激した。

そんなこんなで迎えた放課後。零さんは部活があるらしく、すぐに教室を出てしまった。それと入れ違いように教室に入ってきた団体に、僕はすっこけそうになった。

全員頭にハチマキを巻いたその集団は

「たのもー！！」

と道場破りの様な事を言ってきた。

彼等の頭に巻いてあるハチマキをよく見ると、

『KDCばんざい！！』『竜崎さん最高！』『風火ちゃん萌え』

などと、まったくもって意味不明な事が書いてあった。

うつわ、なんかかなり痛い人達出てきたよ。とか思っていると、

「我々は、このクラスに転校生が来たとの情報を得た。さあ、どこにいる。」

と言って教室内を見渡す。

「会長！あの娘ではありませんか？」

そう言って会員A（会長って言ってたからなんかの会なんだろう）が指差した先は…。

（光っ！？）

彼等は何故か光を指差していた。会長が

「むう……」

と唸った後、

「我等の予想を遙かに上回るスペックだ！」

と、これまたわけの分からん事を言う。

そして彼等は一斉に光に向かって歩き出した。

とうの光は、怯えた表情でただ立ち尽くしていた。 あー、これはあまりよろしくない、そう思った僕は、さっと光の前に立ち塞がる。

「何だね、君は。」

と会長に尋ねられる。

「貴方達こそだれですか？」

そう聞き返した僕を会長は鼻で笑ってから

「我等の事を知らぬとは、とんだ愚か者もいたもんだ」

と哀れみを含んだ声で言ってきた。 そして会長はふんぞりかえって

「我等こそ！月光学園K（カワイイ娘）D（大好き）Cだ！！」  
クラフ

と、声を張り上げて言い切った。 なんだよその、○ケ○ン大好きクラブみたいな会は！僕は思わず突っ込みそうに なって慌てて自制する。 こんなわけの分からない人達に関わるもんじゃない。 そう思い

「ああ、そうですか。それじゃ僕達はこれで」

そう言い残して帰ろうとすると、 「ちよっと待ったー！まだ帰すわけにわいかん」

いきなり腕を引っ張られて少しこけそうになった。

「なんなんですか？いきなり」

そう聞くと、

「君に用はない」

と、会長は言ってから光に向き直る。

「喜びたまえ。君は我等KDCが崇める女神の一人に認定しよう」

ああ、また変なこと言ってるよ……。どこまでも痛い彼等に僕は呆れてしまった。 てかさろそろヤバイと思う。 なにがって？そりゃもちろん光の事さ。



「うつ、うつ、うわぁ〜ん！ ま〜く〜ん！」

光はいきなりなきながら僕に抱きついてきた。ああホラ泣いちゃったよ。僕は光の頭を撫でながら、

「もう大丈夫だから。ねっ？ ほら、泣きやんでよ」

昔から光は泣いた時こうやると泣きやんでた。ついでに言うとなんか昔は僕の事を、ま〜くんと呼んでいた。

しばらくして段々光は泣きやんできた。無理も無いが、人見知りの激しい光がいきなりあんな事言われたら泣いてしまうよな…。

「もう大丈夫？」

「うん、ありがとう兄さん」

そう言っただけで光は微笑んだ。その微笑みを見て、やっぱり光は笑っている方がいいな、なんて思っている…

（あれっ…）

さっきまで騒がしかった教室が一気に静まりかえっていた。そして、その静寂はすぐに破られる。

「ウガァー！ 貴様今何やった！？」

「兄妹で… あんな…」

「お前は変態かつ！？ 実の妹にあんな事！」

いきなり煩くなった教室に僕は思わず耳を押さえた。

「あー！ 煩い！ 僕は変態じゃない！ てか僕達は実の兄妹じゃない！ 気が付いたときには、そう言っただけだ。」

「な、何だと…、では光ちゃんも貴様の義理の妹と言う事か…？」  
今まで黙ってた会長はそう呟いた後に、

「ガァー！！ なんておいしいシチュエーションなんだー！！ 貴様、生かしては置けんっ！ 皆のもの、であえ、であえー！」

と叫びながら僕に跳びかかってきた。その後が続いてKDCのメンバーと嫉妬に狂ったクラスメイトが襲いかかる。

「うわぁ！ な、何っ？ 僕何もしないよ！？」

「貴様の存在がこの学園のバランスを崩すのだ！」

「わ、わけわかんないって!？」  
そう言って、僕はとりあえず全力で逃げ出した。

(はあ…、何であんな事になったんだろ。)僕は走りながらそんな事を考えてた。僕は今、北棟と呼ばれる校舎にいる。

なるべく人の居なさそうな所で暫くの間隠れていようと思った僕は、今の時間帯使う事のない北棟に来たと言う訳だ。

「ふう…、ここまで来ればもう…」

大丈夫、と言おうとした矢先、前の廊下から何やら声がした。

(やばっ!)

と思った、僕はとっさにすぐ近くにあったドアに入った。

その裏庭へのドアに、見えなかった文字で、

【立ち入り厳禁】

そう書いてあった事も知らずに。

## 第六話 KDC襲来！？（後書き）

次回からやっと少しファンタジーが入ってきます。      こんな駄文  
でよければ評価してやって下さい。 狂喜乱舞して喜びます

## 第七話 化け物出現！？

とっさに入った扉の向こうには、何もない広い空間があった。まったく整備されてないその空間は、ただ荒れた地面とそれを囲むようにある木々だけだった。まるで深い森の中の開けた空間のようなその場所を始めて見た時、僕は違う世界にでもきたのではないかと思ってしまった。しかし、僕の後ろにはちゃんと校舎もあるし、さっき入って来た扉もある。

不思議に思いながらも、好奇心でこの場所を歩き回った。

あたりが暗くなった頃には、とりあえず目で見える範囲は調べ終わったけど、結局何もなかった。携帯電話で時間を見ると【6：13】と表示されていた。

（もうこんな時間か…そろそろ帰らないと）

そう思い、携帯電話から目を離れた時、背後から異様な感じがして、僕は慌てて振り向いた。

そこには、化け物がいた。

ライオンのような体に狼のような頭、口から延びている鋭い牙は全ての物を噛み砕いてしまいそうだった。その化け物は低い声で唸

りながら少しずつ僕の方に近づいてくる。

（マジかよ…）

そう思いながら、僕はジリジリと後退りする。少しでも隙を見せれば、こちらが殺られる、その事を昔の経験から学んでいた。そう、僕はこいつのような化け物に襲われたのは今回が初めてではない。まあ今は、昔の事を呑気に思い返している余裕なんかまったくないけど。

（どうする……倒したくても僕は能力者じゃないから【力】も使えないし…）

こんな時、能力の使えない自分がとても無力に感じる。

（くそ、どうすればいいんだよ…）

そして、とうとう化け物が僕に向かって跳びかかってきた。

「うわぁっ！！」

僕はとっさに横に跳んで回避する。さっきまで僕がいた場所に化け物は着地して、またこちらに向かって跳んで来た。

「くっ、やるしかないのか…！」

僕は覚悟を決めて、跳んで来た化け物の顔にタイミングよく回し蹴りをする。

僕の蹴りは化け物の顔におもいつきり当たって、化け物を数メートル吹っ飛ばした。

それでも、武術には多少の心得がある。初めて化け物に襲われた時何もできなかった僕は、その後に光の母に弟子入りして、強くなるうと修行に励んでいた。そのかいあって、今現在なんとか戦えている。化け物の攻撃を避けては反撃して、距離をとってまたカウンターで攻撃すると言う戦法で相手を少しずつ弱らせていく。

（このままいけば勝てる！）

そう思った時だった。

「ゲウオオオー！！」

と、化け物はいきなり天に向かって吠えた。すると空中から突然無数の火球が現れて、僕に向かって飛んで来た。

「うおっ、わあっ！」

次々に飛んでくる火球をなんとか回避するが最後の火球を避けた時に、タイミングを合わせて化け物が跳んで来た。

（やられるっ！？）

僕は死を覚悟して目を閉じた。しかしいつまでたっても何も起こらない。

僕は恐る恐る目を開ける。

そして初めて目に写ったのは、頭を斬り飛ばされた化け物と、一振の大太刀を持った零さんだった。

## 第八話 B G 部ってなんですか？（前書き）

はつきり言ってダメダメです。テストの息抜きに書いてみたけど、自分で読んでこりゃダメだと思いました。けど、一生懸命書いたの  
でどうか見てやってください

## 第八話 B G 部ってなんですか？

頭を大太刀で斬られた化け物は段々と光の粒子となって、最後には跡形もなく消え去ってしまった。

「大丈夫か？」

今まで呆然としていた僕は、零さんの声で我に帰った。

「へっ！？あっ！はい、大丈夫です」

「そうか。だが、どうしてこんな所に真哉がいるんだ？ここは立ち入り禁止だったはずだが…」

何かブツブツ言った後に零さんは、

「そんな事よりも、お前はなんて無茶をしたんだ、生身で魔族と戦うなんて」

と、責めるように聞いてきた。

「いやあ、まさかあんなのが出てくとは思わなくて。……ていうか魔族ってなんですか？なんで零さんここにいますか？」

僕が真面目にそう聞くと、零さんは呆れたように溜め息を吐いた。

「そう言えばお前は転校生だったな…まあ、知らなくて当然か…」  
「？なんのことですか？」

「いや、いい、気にするな。魔族については授業で習うと思うぞ。それと、私がここにいる理由だが……」

僕はわざわざ太刀なんて持って、化け物を退治する理由に興味津々だった。そして、少しの間を置いて零さんは口を開いた。

「部活だ」



なんですかね、それ。

「ぶ、部活…ですか？」

「そうだ、部活だ」

僕は混乱している頭で必死に考えた。

（大太刀振り回して化け物退治する部活ってなに！？）

すると、僕が混乱しているのがわかったのか、零さんは悪戯っぽく微笑むと、「なんなら部室に来てみるか？」

と言ってきた。僕はその微笑みにドキツとしつつ、

「え、いいんですか？」

と答える。正直かなり気になる。

「ああ、別にいいぞ。」

付いてこい、と言って校舎に向かって行く零さんの後を、僕は多少の不安を抱きながらも付いて行った。

そして、現在僕は全部で三階ある部室棟の一階にいます。零さんに付いて行きながら周りを見渡すと、一階だけでもかなりの数の部活がある事がわかった。

しばらく歩いていると、零さんが立ち止まって、

「ここが私が入っている部活だ」

と言った。僕は扉に付いている部活名をみてる。

【B G 部】そうそこには書いてあった。

（ＢＧ部！？こ、これはまたあんまり聞いた事の無い部活だなあ…）

僕がその名前について大いに悩んでいると、零さんはそんな事お構い無しに部室入って行つた。僕も慌ててその後に続いた。

部室の中は案外広くて、なんだか会議室みたいな所だつた。そしてその中でもっとも僕の目を引いたのは、部屋に置いてあつた棚いっぱいに置いてあるボードゲーム達だつた。

（ボードゲームだからＢＧか）

そんな事を一人納得していると、零さんは部室の奥のひとときわ大きい、まるで社長室にあるような机がある所まで進んで行く。その机の前まで来ると

「ただいま戻りました。部長」

と言つた。すると、今まで僕達の反対側を向いていた回転式の椅子がゆつくりとこちら側に振り返つた。

「ああ、ご苦労だつた」

そこにいた人物はそう答えた。部長と呼ばれたその人は、知的なメガネをかけたいかにも優等生っぽい感じの人だつた。そして部長は僕が存在に気付くと、

「おや、君は？」

と聞いてきた。僕は慌てて、

「２年の神崎です」

と答える。いきなり質問されて、ちよつとびつくりしてしまつた。

「彼、新入部員？」

部長は、今度は零さんにそう聞く。

「いいえ、違います。…ですが、魔族との戦闘を見られてしまいました。」

零さんはそう言つたが、実際は一瞬で零さんが化け物を倒したので僕はほとんど何も見てない。

零さんの言葉を聞いて、部長は少し考えてから、

「ふむ、そうですか……なら、彼を我が部へ入部させるのはどうでしょう」

部長の言葉に、零さんも、

「そうですね、それがいいですね」  
なんて言っている。

「ち、ちよつと待ってください！どうしていきなりそうなるんですか！？」

僕は反射的にそう聞いていた。なんで僕がこんな変な部活にはいなければならないのか。そんな事を考えていると、部長さんが「君は故意にはないにしろ、我が部の裏の顔を知ってしまった。これは言わば口止めだよ」

と、わざわざ理由も教えてくれた。僕は溜め息をつきながら、最後の悪あがきに

「拒否権を発動します」

と言ってみるが、

「却下だ」

やっぱり、零さんに切り伏せられた。

こうして僕は、転校してそうそうに、変な苦勞をしてしまう事になってしまった。

## 第八話 B G 部ってなんですか？（後書き）

転校編はこれで終わりです。次からは球技大会編です

## 第九話続・いつもの日常（前書き）

更新しました。よかったら読んでください

## 第九話続・いつもの日常

朝と言つのは一般的に、清々しいとか爽やかみたいなイメージがあるけど、僕の場合はまったく違う。

眠い、とにかく眠い。朝に弱い僕が思う事はこれだけだ。

そして、僕の朝の苦勞がもうすぐやってくる。

それは、そつとドアを開けて、

「兄さん！起きろー！」

おもいつきり、寝ている僕の上へダイブ！

「ぐふおー!?」

痛い。めっちゃ痛いです。毎回これでは身がもちません。

「い、いい加減この起こし方止めてよ光」

僕は、毎回朝から僕の事を半殺しにする妹の光に懇願する。

「だゝめ！兄さんは普通の起こし方じゃ起きないんだもん。そんな事言つてないで早く朝食作つてよ」

そう言つと、部屋から出ていく光。理不尽に思いながらも、僕は学生服に着替えて台所に向かった。

トーストとハムエッグに、インスタントのコーンスープと言う簡単な朝食を作つて、それらをテーブルに置いてから自分の椅子に座る。光も座つたところで、一緒にいただきますと言つてから食べ始める。

「あ、そうそう兄さん知ってる？もうすぐ球技大会があるんだつて」

光がいきなり、思い出したように言う。

「へー、そうなんだ。なんでそんな事知ってるの？」

「友達に教えてもらったの」

僕は、人見知りの激しい光にたった一日で友達が出来たのに少し驚いた。まあ、喜ばしいことではあるけど。

その後も、光と少し話しをしながら朝食を食べて、食べ終わった後に片付けをしてから、僕達は一緒に家を出た。

学校に到着すると、昨日覚えたばかりの自分達の教室に向かう。

教室の中に入って、自分の席に座ると、隣に座っていた男子が、「よっ、おはよう」

と、挨拶してきた。

「おはよう。ええっと…」

僕が相手の名前がわからないでいると、それを察したように、

「俺、西田にしたまこと誠よろしくな！」

そう名乗ってきた。「うん、よろしく」

と、僕も笑顔で答えた。

その後も、西田君と色々喋っていると、チャイムが鳴って先生がやってきた。

S H Rが終わると先生が教室を出てから、違う先生が入って来て、早速一限が始まった。

最初の授業は、昨日僕が遭遇した魔族に関する話だった。

魔族について簡単に説明すると、下級、中級、上級に分かれていて、下級の魔族は知能も低いしあまり強くもないらしい。

中級になると魔法が使えるようになるらしい、多分昨日の魔族は中級だったのだろう。

そして上級になると、人の言葉も理解できる程の知能と高い戦闘力があるらしい。

後、更にその上のレベルの魔族を魔王と呼ぶらしい。

魔王についてはあまり多くの事は知られてないが、圧倒的な力を持っているらしい。まあ、仮にも魔王なんて呼ばれてくるくらいだからかなり強いのだろう。それと、もう一つ魔族と似たようなもので、神族と言う物も居るらしい。基本的には魔族と同じで下級、中級、上級に分かれていて、その上に神王と呼ばれる存在が居るらしい。

授業の話を簡単に説明すると、こんな感じだ。

最初の授業の後は、数学とかの授業で、普通の高校とあまり変わらなかった。ただ一つ変わった事は、前に居た高校よりも授業内容が難しい事くらいだけど、勉強があまり得意ではない僕的には、かなり大問題だ。

午前の授業が終わって、今は昼休み。食堂に行く人や、現在戦場になっているであろう購買に行く人も居た。

その中で、僕は持ってきた弁当を食べようとしたところで、  
「今から昼食か？」

と、零さんに声を掛けられた。

「はい、そうですよ。零さんですか？」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、よかつたら一緒に食べませんか？」

「む、いいのか？」

ちよつと控え目に零さんが聞いてくる。

「はい、一人で食べるより二人の方がいいじゃないですか」

「そうか、ならお言葉に甘えさせてもらおう」

そう言って空いてる椅子に座って、持っていた袋を机に置く零さん。その袋の中にはコンビ二弁当やおにぎり、飲み物にイチゴ牛乳があった。それを見た僕の感想は、

（イチゴ牛乳って…、零さん、可愛い所もあるんだなあ）

と言う、少し不健全なものだった。

早速食べようと僕達が箸をもった時、

「兄さん！一緒に食べよう！」

いきなり光が隣から大声を出したので、あやうく弁当を落としかけた。

「い、いきなり大声出すなよ光！」

「そんなの知らないもん！」

文句を言った僕に光はそう言つと、自分の弁当を食べ始めた。



どうして光が怒ったか分からない僕と零さんは思わず顔を見合  
せた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6360a/>

---

主人公は苦勞人

2010年10月28日09時28分発行